

## 無心無構（むしんむがまえ） 現代武道の教育理念として

# 無心無構

富木謙治師範は「無心無構」を現代武道の教育理念として提唱するにあたり次のように記しています。

「無心」とは、一切の喜怒哀楽の感情によって曇ることのない明鏡止水の心を指す。それは消極的な心を意味するものではなく積極的なはたらきのある心を意味する。

「不動心」「無住心」「空の心」というのも同義であって、仏教ばかりでなく、儒教や神道をも含めて、また、現代倫理のめざすところ、道徳的「善」の立場からみて、心の修養における最高の理想である。

武術を競技化して、勝負の場を設定することは、現代的方法として、心の葛藤を整え、勝負を超えて「無心」を学ぶための唯一の「場」である。だが、競技化には限定がともない、ややもすれば、偏技に走って「無構え」の理想を忘れる。「無構え」を学ぶために、正しい「形」の鍛錬工夫を忘れてはならない。

（「日本武道の独自性」1973）

## 合気道を 始めたい方へ



合気道を始めたいと思われた方は、日本合気道協会のホームページの「道場検索」からお近くの道場を探してみてください。稽古場所や時間帯を確認し、条件が合うようでしたら、そこに記載されている連絡先からその道場の代表者へご連絡ください。

<https://aikido-kyokai.com/>

[検索] 富木合気道



## 富木謙治師範略歴



1900年秋田県生まれ、6歳頃から木刀の素振り、10歳頃から柔道を始める。

1924年東京柔道学生連盟幹事として柔道創始者・嘉納治五郎師範の警咳に接し、その教育・武道思想に多大の影響を受ける。1926年に合気道創始者・植芝盛平翁と出会い、生涯にわたる柔道と合気道の研究・修業が始まる。

1929年天覧武道大会(柔道の部)に出場、ベスト12。1931年秋田県立角館中学校に公民科教師として赴任し、柔道囑託を務めていた大庭英雄と出会う。

1940年植芝翁から合気道界初の八段を許可される。

1954年早稲田大学教授(教育学部)。以後、講道館護身術の中心的制定委員としてその策定に尽力した。

1974年日本合気道協会を設立、初代会長となる。嘉納師範以来の課題であった柔道における離隔態勢の技の基礎理論と指導法を初めて体系化した。

1979年没。

## 大庭英雄師範略歴



1910年秋田県生まれ。

1930年秋田県立角館中学校(現秋田県立角館高校)卒業。柔道の實力を見込まれ、同中学校柔道囑託として指導に当たる。

1931年角館中学校に富木謙治が公民科教師として赴任。兵役を経て、1949年講道館6段。1951年秋田県警察柔道担当の術科係長及び警察学校師範。

1960年早稲田大学体育局講師、合気道師範就任。富木教授の求めに応じての単身上海であった。

1978年日本合気道協会初めての九段を許可され、1979年富木謙治師範の跡を継いで日本合気道協会第二代会長に就任。

1960年以降、早稲田大学、国士舘大学、警察大学校などのコーチを歴任。

1970年以降台湾、英国、欧州等で海外指導し、国際的普及に励む。合気道九段、柔道六段、剣道四段、薙刀参段他多種武道を研究修行する。

1986年没。



1942年(昭和17年)満洲(現中国東北部)にて植芝盛平先生(前列右)と。植芝盛平先生の左に富木謙治先生、後ろに大庭英雄先生。



## 富木合気道のすすめ

Recommendation of Tomiki Aikido



特定非営利活動法人  
日本合気道協会  
NPO JAPAN AIKIDO ASSOCIATION

# 富木合気道とは

合気道は柔道等と同じく日本古来の柔術から生まれた武道です。柔道は組み合った位置から技をかけますが、合気道は手が触れ合うくらいの位置から技をかけます。合気道では関節技や当身技を主に稽古します。

富木合気道とは、合気道創始者 植芝盛平翁の高弟であった富木謙治師範(柔道八段・合気道八段)が、合気道の近代化に取り組み、体育学的に編成した教育体系を言います。それまで約束による「形」稽古のみだった合気道に、自由に技をかけあう「乱取り」を導入し、合気道の競技化の道をひらきました。稽古者は形と乱取りの両者をあわせて学びます。



# 日本合気道協会について

特定非営利活動法人 日本合気道協会とは、富木謙治師範(早稲田大学教授)が創案した合気道教育体系(富木合気道:合気道競技)に関する技法講習会や競技会等を開催運営する特定非営利活動法人(東京都認可)です。合気道を生涯教育としてとらえ、スポーツを通じた健康的な生活の推進に寄与することを目的としています。



# 合気道競技とは

柔道の嘉納治五郎師範は古流柔術を体育学的に編成して柔道を生み出しました(柔術の近代化)。富木師範は、戦後の体育教育の文脈において、以下のように、嘉納師範の遺志を継承していきました。

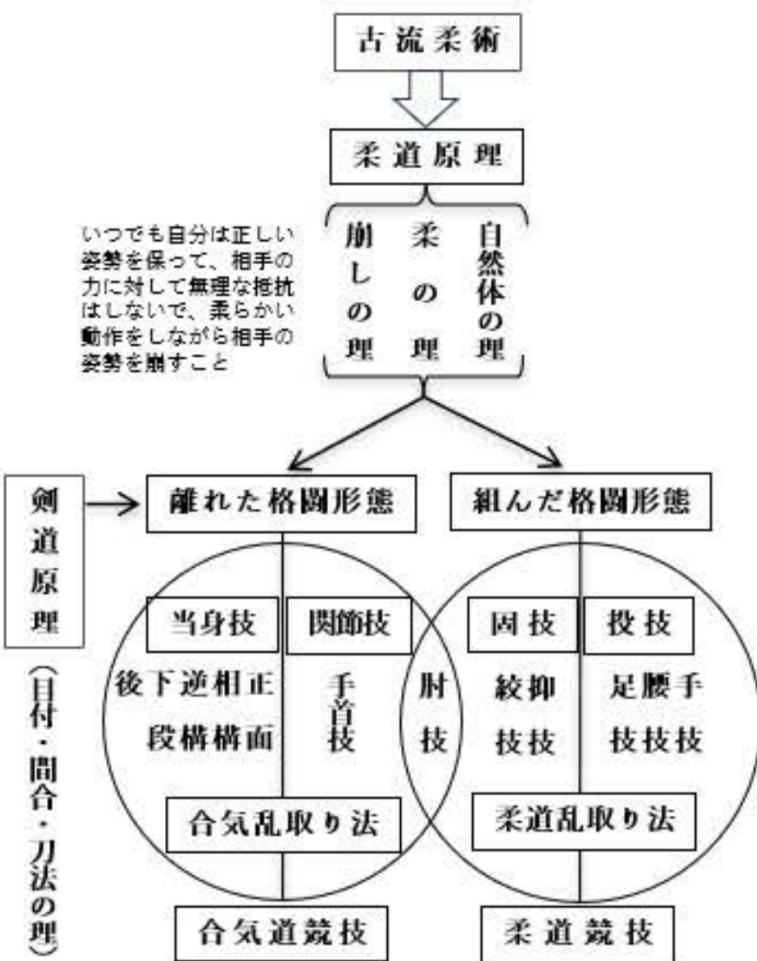
柔術の技は、組み付く、打つ、突く、蹴る等の様々な攻撃に対する技、あるいは背面や側面からの不意の攻撃に備える技、さらには座っている場合における技や、また武器での攻撃など、その内容は複雑多岐にわたります。この中から嘉納師範は、襟と袖に組みつく「組む」格闘形態の技を競技化して今日のオリンピック・スポーツ、柔道の基を作りました。

一方、富木師範は嘉納師範の偉業を受け継ぎつつ、さらに襟と袖に組みつく前の態勢すなわち「離隔(りかく)の間合いからなされる当身技に対抗する柔術技法を研究し、新たな競技システム「柔道第二乱取り法」を創案しました。この創案に当たって決定的な影響を与えたのが、間合いと目付、そして刀法を核とした剣道の理論と、植芝盛平翁の合気柔術(後の合気道)です。合気柔術の技術内容は柔術のそれと軌を一にしており、植芝翁が卓抜した技能を持っていたことから、富木師範は大正14年から植芝翁に師事し、その技法を修業・研究しました。



新たな競技システム「柔道第二乱取り法」を別名合気乱取り法と呼びます。合気乱取り法は当身技と関節技を練習するために競技の場を与えるものです。投技と固技を用いる組む競技は柔道競技ですが、当身技と関節技を用いた離隔(りかく)の競技を合気道競技と呼びます。

「関節技」は手首や肘など関節の弱点を利用する「わざ」ですから、これを競技として烈しく練習しても危険をとまなわれないようにするためには、順序だった鍛練をすること、「極め方」の動作に対する限定をすることが必要です。合気乱取り法では鍛練と限定とによって危険を予防しています。「当身技」の場合も同様に鍛練と限定とによるのですが、合気乱取り法の当身技は「相手の力学的弱点(姿勢の崩れ)に乗じて、力を加えて倒すこと」をさし、衝撃による破壊を目的としません。



いつでも自分は正しい姿勢を保って、相手の力に対して無理な抵抗はしないで、柔らかい動作をしながら相手の姿勢を崩すこと

「柔道の技」は、力の使い方が一般的に求心的であり、とくに腕の屈伸を多く用います。これに対して「合気道の技」は、力の使い方が遠心的であり、主に伸筋を働かせます。両者の調和的な練習こそが、運動生理学的に望ましいことなのです。

# 日本合気道協会 会長 富木昌子 あいさつ

日本合気道協会は、子供からシニアまで幅広い世代を対象として、各人の体力、志向に応じた稽古を楽しく安全に行えるようサポートし、各種競技大会を開催しています。また合気道についての科学的解析と合気道競技の進化を目指した研究活動を行っています。さて本協会の創設者 富木謙治は柔道と合気道を学び、やがてその価値を如何にして現代社会に活かすことができるかを模索し研究を続けました。そして古い時代には秘密の武技とされた技にも光をあて、その理念を明らかにし、様式を整えて広く伝えようとしたのです。次の言葉は富木の武道に対する誇りを端的に表しています。「日本の武道文化の真髄は時代を超え、民族や国境を超えて、世界の人々が心から喜んで迎えてくれるものである。」こうして始まった合気道競技ですが、競技をしない人にとっても、その稽古体系は生涯体育として相応しい内容になっています。合気道の技は、人間の体のしくみを巧みに利用して繰り出されます。この動きを習得する道程を楽しみながら、稽古を重ねて得られる境地は測り知れません。少しでも多くの方に合気道競技の深い魅力が伝わることを願っております。

# 日本合気道協会 師範紹介

本協会には国内外に複数の認定された師範がいます。ここではその代表として佐藤忠之師範を紹介します。



佐藤 忠之 (八段)

佐藤師範は父・五八郎が主宰する浜松の養神館道場(柔道場)で、幼少の頃から嘉納師範直伝の柔道を学び、名門の天理高校に進んでからは競技柔道を学んで武道の基礎を作った。早稲田大学進学後に合気道部に入部し、1980年全日本学生合気道競技大会個人戦優勝。富木師範から特別の指導を受けた。以後富木師範の教育体系を細部にわたって研究し、その成果を著述・出版した。その指導力は合気道家、国内及び海外の柔道高段者のみならず、高名な格闘家をも魅了し、専門誌で紹介されている。

○経歴：早稲田大学スポーツ科学部・同グローバルエデュケーションセンター・日本文化大学講師。警察大学校部外講師(逮捕術)。国際武道院(日本柔術部特別講師)。早大合気道部他十数のクラブで師範を務める。  
○著書：(単著)『富木合気道の実力』『合気道の自修帖』。(共著)『富木謙治の合気道』